

## ロレンスの「ハイビスカスとサルビアの花」

— 怒れる竜 —

松 本 桂 子

〔抄 録〕

「ハイビスカスとサルビアの花」は、ロレンスの詩集『鳥・獣・花』に収録されている長詩である。新約聖書の『ヨハネの黙示録』に登場する赤い竜を、隠れた題材として扱っているこの難解な詩を探究するには、同じくロレンスのエッセイ『アポカリプス』を無視する事はできない。両作品には、彼の思想、特にヨーロッパのキリスト教観が必然的に相対しているからである。『アポカリプス』との綿密な照合により、詩中で謳い上げる詩人ロレンスの内面の声に耳を傾けながら、そこに浮かび上がる赤竜の真意を解き明かすことを本稿での目的とする。

キーワード ハイビスカス、サルビア、主義者、怒り、赤い竜

情熱的な花々を主題としたロレンス (D. H. Lawrence, 1885-1930) の詩、「ハイビスカスとサルビアの花」(‘Hibiscus and Salvia Flowers’) は、イタリアのシチリア島 (Sicily) 東海岸にあるタオルミーナ (Taormina) で書かれた。タオルミーナはロレンスが1919年から1922年まで静養のために滞在していた地である。そこに実在するメインストリート (Corso Umberto) を背景に、綿々と詠われる緋色の花たちは、「赤い竜」(red dragon) として怒りにも似た強烈な表象性を発揮する。この赤い竜は、ロレンスの絶筆となった『アポカリプス』(Apocalypse 1931) においても、生命の鼓舞者のごとく熱く語られている存在である。しかし、本来「赤い竜」とは、『ヨハネの黙示録』の中で異教徒的な邪悪なものと見なされ、大天使ミカエル (Michael) に撃退されて底知れぬ地下に閉じ込められ封印される運命にある悪竜である。この哀れな巨大竜こそが悪魔サタンと呼ばれる年老いた蛇なのだ。ヨハネと対極するロレンスの赤い竜とは？ その怒りとは何かを紐解きながら、詩全体を貫く詩人の思考に迫りたい。

詩「ハイビスカスとサルビアの花」は、大きな三つの象徴的モチーフから構成されている。ひとつは詩中で連呼される「主義者」(-ist)、そして残りのふたつは詩題にあるハイビスカスとサルビアの花である。まず、詩の前半部分を占める「主義者」という言葉の深意を明らかにするために、今一度ロレンスのキリスト教観にさかのぼってみる必要がある。ロレンスのあらゆる思想がそこから発生し、連鎖していると考えられるからだ。

伝統的なキリスト教の教義を受け入れられず、とりわけ『ヨハネの黙示録』に対して反発を感じていたロレンスは、自らの『アポカリプス』の中で激しいヨハネ批判を展開する。「ヨハネの黙示録」とは、パトモスのヨハネの宗教が、聖書の巻末に権力意識を忍び込ませ、黙示録の仮面を被って王座に這い上がったものだと云う。また、黙示録とは、人間のうちにある不滅の権力意思とその聖化、その決定的勝利に他ならないとも云う。そして、その権力意識というものは大多数という集団、あるいは共同体の中から生まれるものであり、ひとたび集団的自我に手を触れたなら、あらゆる聖人が悪人と化せざるを得ないのだと断じている<sup>(1)</sup>。これは単に『ヨハネの黙示録』への非難という解釈だけにとどまらず、根本的には、当時の権威に満ちたキリスト教会への弾劾だと受け取れる。ロレンスは、人間は本来権力欲、支配欲を持つものだとすることをはっきりと是認すべきだと主張し、自分たちに内在するその欲望を包み隠そうとする、見せ掛けのキリスト教的愛他思想を憎んだのである。いずれにしても、集団的精神から生じた権力意識に対するロレンスの嫌悪感は、推して知るべしである。以上のことを踏まえて詩「ハイビスカスとサルビアの花」に目を向けてみることにしよう。

一連目から七連目までは、社会主義者に対して嘲笑的に、はやし立てるように謳い上げる詩人の声が響き渡る。

*Hark! Hark!*  
*The dogs do bark!*  
*It's the socialists come to town,*  
*None in rags and none in tags,*  
*Swaggering up and down.*<sup>(2)</sup>

「聞け！聞け！／犬たちがほえる」(*Hark! Hark! / The dogs do bark*)は、イギリスの伝承童謡マザー・グースからの引用である。マザー・グースでは二行目、三行目は「こじきが町へとやってくる／ぼろを着たのや、つぎはぎ着たの」(*The beggars are coming to town / Some in rags, And some in jags*)<sup>(3)</sup>と歌われているが、この詩（‘Hibiscus and Salvia Flowers’）では原文をもじって「町へやって来たのは社会主義者たち、ぼろ服も着ていない、ぼろ布もまともわず」(*It's the socialists come to town / None in rags and none in tags*)と変化させている。

詩の創作が1919年から22年頃だとすると、「社会主義者」という言葉の背景には、ロシア革命（1917）直後の世相が反映されていると推測できる。もしかすると、当時詩人の目に焼きついた実際の映像が描写されているのかもしれない。「肩を揺らしていばって歩く」(*Swaggering up and down*) 彼らを眺めながら、思わず口ずさんだのが、世相を風刺した替え歌のようなものだったという訳か。詩人が見た集団というのは、陳腐で滑稽な印象を与えたに違いない。

しかし、非難の矛先は社会主義者に限定されているわけではない。七連目では「過激主義者 / レーニン主義者 / 共産主義者 / 社会主義者 / 主義者！ 主義者！」(Bolshevists. / Leninists. / Communists. / Socialists. / -Ists! -Ists!)<sup>(4)</sup>と、ひとつのものに固守せず、あらゆる一定の主義を持つものに対しても皮肉な表現で畳み掛ける。主義者への批判的態度は『アポカリプス』においても証明される。例えば、今日我々のうちに一人として「けちくさい過激主義者」(petty little bolshevists)<sup>(5)</sup>ならざるものはないとか、レーニン主義に関しては、レーニンを聖徒の頭と祭り上げ、聖徒政治が実現されたと主張し、レーニンのごとき男は権力の徹底的破壊を信じていた「極悪の聖者である」(a great evil saint)<sup>(6)</sup>などと、侮蔑的言葉で論難を浴びせている。また、固有の生を尊重するロレンスは、主義者という集団について、彼らは社会的意識の断片に他ならず、単に集団的に行動しているだけで、実際にはなんら個人的な情動も、感情も、思想も持ちあわせていない「凡庸の徒」(middling souls)<sup>(7)</sup>だと、一刀両断に切り捨てている。これが主義者という集団に対するロレンスの哲学である。そして、詩に登場する社会主義者たちもまた、内面の自己を消滅し、空虚な精神であるにもかかわらず、権力面だけは忘れずいるというのだ。詩の前半で反復される「あいつらに会う時には、どのようにしてあいつらだと見分けよう？」(How shall we know them when we see them?)<sup>(8)</sup>という疑問が、後に続く「同じ平凡な日曜のスーツを着て / 気取った風に帽子をピンと立て、体を揺すって歩いている」(The same unremarkable Sunday suit / And hats cocked up and down)<sup>(9)</sup>に呼応していることから納得できる。特徴のない、機械仕掛けの人形のような彼らを社会主義者だと識別するには、体裁を飾り、町を闊歩するその姿だけが唯一の手掛かりと云う事なのだろう。容赦のない皮肉である。先にも触れたように、このような集団的権力志向への咎めは、元はロレンス独特の異端的とも云えるキリスト教観から生み出されたものである。転じて述べるならば、詩中で使用される「主義者」という言葉は、ロレンス的表現で云う、キリスト教会に群がる自尊と権力渴望にまみれた教会人の象徴と捉えることもできる。

上記のような主義者に対する厳しい攻撃の後に、突如対象は一変して美しいハイビスカスとサルビアの花に向けられる。前半の鋭い口調とは打って変わり、詩人はいとおしようにハイビスカスに呼びかける。

Rosy, rosy scarlet,

And flame-rage, golden-throated

Bloom along the Corso on the living, perambulating bush.<sup>(10)</sup>

「バラ色の」(rosy)とはロレンス特有の表現技法である。単純に色彩を示すものではなく、全ての根源である原始的なイメージ、いわゆるロレンスの心を強く惹きつけて止まない、暗黒の世界で授けられた生命の比喩である。ロレンスの他の詩作品「全ての世界のバラ」('Rose of

All the World' ) の中では「花たちよ、僕の愛しいもの、花たちよ、バラの中のバラであれ」(Blossom, my darling, blossom, be a rose of roses)<sup>(11)</sup>と熱く呼びかける連がある。「バラの中のバラ」とは、原初の純粋なバラの花を意味しており、あらゆる花に対しても、太古に生まれた生命溢れるバラのようであってくれと希求しているのだ。故に、ハイビスカスの花にも、生命の息吹を感じさせる本源的な意味合いが含まれていることが分かる。次の「炎のような激怒、金色の喉をした花」(flame-rage, golden-throated) とは、ハイビスカスの花心を形容している。めしべの先につけられた黄色の花粉が「黄金の喉」を思わせ、その姿が猛り狂う怒りのようだと云う。

「黄金の喉」が誰のものなのか、誰の怒りが炎のようなのかを謎としたまま、次のサルビアへの呼びかけでその正体が明らかにされる。

Or salvia!  
 Or dragon-mouthed salvia with gold throat of wrath!  
 Flame-flushed, enraged, splendid salvia,  
 Cock-crested, crowing your orange scarlet like a tocsin  
 Along the Corso all this Sunday morning.<sup>(12)</sup>

「激怒の黄金の喉をもつ竜の口をしたサルビア」(dragon-mouthed salvia with gold throat of wrath) と、ここで初めて「竜」という語が登場する。そして、ハイビスカスと同様にサルビアの花も「炎のように紅潮して、怒っている」(Flame-flushed enraged) と訴える。しかも、何か「警鐘」(tocsin) を打ち鳴らすような「オレンジ色の緋色の声で鳴いている」(crowing your orange scarlet) とは、意味深長である。

サルビアの怒りの様子はなおも続く。

The dragon-faced,  
 The anger-reddened, golden-throated salvia  
 With its long antenna of rage put out  
 Upon the frightened air.  
 Ugh, how I love its fangs of perfect rage  
 That gnash the air;  
 The molten gold of its intolerable rage  
 Hot in the throat.<sup>(13)</sup>

「長い怒りのアンテナを怯えた大気に突き出している」(With its long antenna of rage put out /

Upon the frightened air) は、「竜の顔をした」(The dragon-faced) 長い花筒を持つサルビアの花が、天に向かい直立している様を表出している。その姿はまるで、口から火を吐く昇り竜を彷彿させるではないか。そして再び、「怒りで赤くなった黄金の喉を持つサルビア」(The anger-reddened, golden-throated salvia) と繰り返す。こうして、緋色のサルビアが激怒に燃え立つ竜であることが読者に強く印象づけられ、同時に、バラ色のハイビスカスもまた怒れる竜の象徴であることが明確となる。その上に、詩人は告白する「大気に歯ざしりする完全な怒りのその牙を、私がどんなに愛していることか」(how I love its fangs of perfect rage / That gnash the air) と。キリスト教を重んじるヨーロッパの人々が、悪と罪の象徴だと恐れる 'dragon' を、詩人は 'how I love' という対照的な表現を用いて自己陶醉しているかのようなようである。しかも「大気に歯ざしりする」で、神が御座する天界に向かい、牙をむき出しにして、怒りを露にする竜の姿を読み手に深く焼き付ける。これこそはキリスト教、あるいは『ヨハネの黙示録』に対する完全無欠な挑戦的態度である。『ヨハネの黙示録』では、稲妻と雷鳴鳴り響く中、翼を持つ巨大な赤い竜が天に現れ、その尾でもって星々の三分の一を掃き寄せふり落とす。そして、ある一人の女性の産み落とそうとする子に襲いかかるが、大天使ミカエルとその天使たちが激しく応戦して、赤い竜は地に落とされ蛇に変じる。無事出産された子供はイエス・キリストだと云われており、赤い竜のこれらの行状は、聖書において敵対者の意を持つサタンそのものとして描写されている<sup>(14)</sup>。一方『アポカリプス』では、竜を古代異教的なものとし「古代竜のもっとも古きものは鮮麗な赤、燃えるような金色、血のような赤だった」(The oldest of old dragons was a marvelous red, glowing golden and blood-red)<sup>(15)</sup>と説いている。これは、前出の根源的な生命を象徴する「バラ色」のイメージと重なる。また、古代の人々の面上に照り映える、燃えるが如き竜の朱色は「栄光の色」(the colour of glory)<sup>(16)</sup>、「生命そのものの輝かしい野生の色」(the colour of the wild bright blood)<sup>(17)</sup>、「王統の神秘」(the royal mystery)<sup>(18)</sup>だと絶賛している。

同様に「ハイビスカスとサルビアの花」の詩においても、その貴族性が連ねられている。

Rose-red, princess hibiscus, rolling her pointed Chinese petals!

Azalea and camellia, single peony

And pomegranate bloom and scarlet mallow-flower

And all the eastern, exquisite royal plants

That noble blood has brought us down the ages!<sup>(19)</sup>

Pure blood, and noble blood, in the fine and rose-red veins;

Small, interspersed with jewels of white gold

Frail-filigreed among the rest;

Rose of the oldest races of princesses, Polynesian

Hibiscus.<sup>(20)</sup>

「バラ色の赤、王女様のハイビスカス」(Rose-red, princess hibiscus) や「素晴らしい王家の植物」(exquisite royal plants)、そして「貴族の血統」(noble blood)などは全て『アポカリプス』に記されている赤い竜の「王統の神秘」と繋がる。更には、ハイビスカスの花が「王女様たちの最も古い民族のバラ」(Rose of the oldest races of princesses) だと言い切っている。つまり、ハイビスカスの花がバラの中のバラであり、生命に満ち満ちた原初の花であることが再認識できる。ところで、ロレンスの貴族という表現には、階級や家柄と云う意は含まれていない。彼自身の評論「トマス・ハーディ研究」(‘Study of Thomas Hardy’)の中で貴族性について述べている。人間は二つに大別されていて、一方は社会という母体から分離した完全な個人。他は、社会の中にはめ込まれて、社会の道徳に従って生きている人間であると<sup>(21)</sup>。前者の、社会の道徳を超えた純粋な生を持つものをロレンスは貴族と呼んでいる。

ここまで詳述して発見できたことは、ひとつには、ハイビスカスとサルビアの花が、ロレンスが創造したヨハネと対立する竜の象徴であること、また、その赤い竜、即ちハイビスカスとサルビアの花には、古代異教徒的な溢れる生命、貴族性が備わっているということ。もうひとつは、主義者という集団には、ロレンスが嫌悪するキリスト教的な特権意識の心象が重ねあわされていることである。それでは、詩中で詠われるハイビスカスとサルビアの怒りとは何か？ また主義者との関連がどこにあるのか？ 読者は詩の前半でその解答に出会うことができる。「これらの花を、あいつらが身に着けてよいと誰が云ったのだ？ / どんな神にあいつらは相談したのだ」(Who said they might assume these blossoms? / What god did they consult?)<sup>(22)</sup>と一目瞭然である。詩人が目にしたのは、主義者たちの胸に挿されたハイビスカスとサルビアの花であったのだ。しかも、ハイビスカスとサルビアの花を身に着けるには、神の許可がいるらしい。ヨーロッパ内部においては言わずとも、神とはキリスト教に等しい。しかし、あえて‘What god’と婉語的に問いかける詩人の狙いは、宗教以前の宗教を想起させることにあったと思われる。何故ならば、ハイビスカスとサルビアは「バラの中のバラ」、キリスト教以前の原初の花なのだから。

今しばらく詩人の声に耳を傾けてみよう。

Sicilian bolshevists,

With hibiscus flowers in the buttonholes of your Sunday suits,

Come now, speaking of rights, what right have you to this flower?<sup>(23)</sup>

Is your wrath red as salvias,

You socialists?

You with your grudging, envious, furtive rage,

In Sunday suits and yellow boots along the Corso.

You look well with your salvia flowers, I must say.<sup>(24)</sup>

この連では「おまえたちはどのような権利を、このハイビスカスの花に対して持っているのか？」(what right have you to this flower?) いや、持っていない、と云う修辞疑問で過激主義者 (bolshevists) に強く迫っている。この言葉の真義は、先に述べた貴族性との区別にある。社会にはめ込まれて特徴の失せた過激主義者たちが、純粋な独自の生を持つハイビスカスを胸に挿すことなど、とんでもないと云う事なのだ。かたや、「サルビアを着けて満足そうな社会主義者たち」(You look well with your salvia flowers) に向かっては「お前たちの怒りはサルビアのように赤いか？」(Is your wrath red as salvias) いや、赤くはないと、これも否定的効果を導くために反語で問いかけている。主義者たちの怒りは、ハイビスカスとサルビアのものとは異質であり、「不承不承の妬みと密かな怒り」(your grudging, envious, furtive rage) であって、不純で卑劣なものだと云いたげだ。彼らが履いている「黄色のブーツ」(yellow boots) という表現の 'yellow' には「臆病者・卑劣・嫉妬深い」の意が含まれていることからもうなずける。赤い竜の怒りについては、『アポカリプス』の中でロレンスは肯定的に述べている。竜とは内部生命のもつ流動的、電撃的、戦慄的な動きを表す象徴であり、己の内に宿る「潜勢力」(rippling potency)<sup>(25)</sup> だと。内部から沸き起こる「突発的な激怒」(the sudden angers)<sup>(26)</sup>、内に潜む、情熱的な燃えるがごとき「激しい憤り」(passionate and terrible)<sup>(27)</sup>、これが竜なのだと明言している。ハイビスカスとサルビアの緋色の怒りが、この赤い竜の憤怒そのものであることは間違いない。そしてその激怒は、情熱的な内部生命の動き、潜勢力の意と置き換えることができる。結果、見せ掛けだけの情熱をふりかざす主義者たちが、真の情熱と活力を備えた花々を身に着けていること、このことに対して、詩人自身が義憤を感じているという事実が鮮明に浮かんでくる。

詩中における主義者への非難と蔑視は、以上のようなことにあったのだ。この後、詩人の怒りは益々拡大されてゆく。

What rot, to see the cabbage and hibiscus-tree

As equals!

What rot, to say the louts along the Corso

In Sunday suits and yellow shoes

Are my equals!

I am their superior, saluting the hibiscus flower, not them.

The same I say to the profiteers from the hotels, the money-fat-ones,  
Profiteers here being called dog-fish, stinking dog-fish, sharks.<sup>(28)</sup>

「何てくだらない！」(What rot) と声を荒げる詩人。キャベツとハイビスカスを「同等」(equals) とみなすこと、主義者と詩人が「同列」(equals) だと云われることが許せないと怒る。竜のごとき真紅の花を咲かせるハイビスカスの生命力が、実っても花を咲かせることなく腐ってゆくキャベツと同じであろうはずがない。ところで、‘equal’ は「平等」という意味でもあり、周知であるロレンスの民主主義批判というものがここに閃く。ロレンスは、近代の民主主義は墮落した現代文明の産物だと感じ取っていた<sup>(29)</sup>。民主主義に関して、彼の妹エルザに宛てた書簡(1922)の中で次のように指摘している「民主主義というものを見れば見るほど嫌になる。すべてが賃金と価格、電燈と水洗便所という卑俗なレベルに引き下げられてしまう、それ以外の何者でもないのだ」(And the more I see of democracy the more I dislike it. It just brings everything down to the mere vulgar level of wages and prices, electric light and water closets, and nothing else.) と<sup>(30)</sup>。この言葉は、詩の後半の「主義者たちは、サルビアの花や、バラ色で繊細なハイビスカスの花、その他全てのものを、彼らの実に嫌なレベルまで引き下げる」(Who have pulled down the salvia flowers / And rosy delicate hibiscus flowers / And everything else to their disgusting level)<sup>(31)</sup>に相当しており、主義者には、当然民主主義の意も含蓄されていることになる。それに加えて、上記の引用にあるような、「暴利をむさぼるもの」(profiteers)、「サメ」(dog-fish)、「フカ」(sharks)などの語を用いて、金銭至上主義への責めもほのめかしている。‘shark’には「強欲な人・高利貸し」などの二重の意味を持つことから証明できる。

これらあらゆる主義者への苛烈な非難の数々は、まるで強大な国家権力、社会そのものへの反発のようであり、果ては人類への呪詛に満ちた言葉へと発展してゆく。

The same I say to the pale and elegant persons,  
Pale-face authorities loitering tepidly:  
That I salute the red hibiscus flowers  
And send mankind to its inferior blazes.  
Mankind's inferior blazes,  
And these along with it, all the inferior lot—  
These bolshevists,  
These dog-fish,  
These precious and ideal ones,  
All rubbish ready for fire.<sup>(32)</sup>



「情熱なく、ただぶらぶらと歩いている青白い権威者たち」(Pale-face authorities loitering tepidly) に詩人は宣告する、「人類をその粗悪な地獄へと送り込むぞ」(send mankind to its inferior blazes) と。‘pale face’ は、すぐ下の行にあるハイビスカスの ‘the red’ と対比させて、青ざめた弱々しい心象を与えている。‘pale’ には「青白い・弱い」の他に「劣った」という意味があり、この連で三度使用されている ‘inferior’ と同義であることに注目すべきである。詩人にとって、ハイビスカスの花たちは尊ぶべきものであるが、その他のもの、「過激主義者たち」(bolshhevists)、「サメ」(dog-fish)、「気取った理想主義者たち」(precious and ideal ones)、は「全てなにもかも劣等」(all the inferior lot) なのだ。ルネッサンス以降、人間中心主義のヨーロッパでは、本当の人間であるためにはキリスト教徒でなければならないという因習に満ちた考えが蔓延していた。ロレンスは詩の中でこのことを逆手に取って、キリスト教中心の、ヨーロッパ的伝統の申し子のような主義者たちを劣等と見なしたのだ。果ては、ハイビスカスの花たち以外全ての劣ったもの、人類そのものを地獄へ落とすと云い放つ。おごり高ぶった現代の人間たちは、純粹にけなげに生きる植物以下という訳である。忘れてならないのは、キリスト教の教義のひとつである『ヨハネの黙示録』では、神の名の元に、赤い竜を初め、神から選ばれた民族以外の全て人間、地球上の全てのものがことごとく破壊され抹殺されてしまう。このことに対してロレンスは、『アポカリプス』の中で「選民の超地上的勝利を幻に描いた」(to vision forth the unearthly triumph of the Chosen)<sup>(33)</sup> 絵巻物ごときものと裁断を下している。これにより、詩中における詩人の破壊願望が、当然『ヨハネの黙示録』を意識した反撃的なものであることが連想される。それと共に、上記引用の「火あぶりの準備のできた全てのくずよ」(All rubbish ready for fire) という呼びかけには、神から選ばれた民を含むあらゆる粗悪な現代人を標的にしていることが分かる。同じくこの言葉は、まるで『ヨハネの黙示録』で目的を果たせなかった赤い竜が、ハイビスカスとサルビアの花として生まれ変わり、詩人の声を借り発したものとして実感できるのではないだろうか。

赤い竜と化した詩人の怒りは、詩の後半にさしかかり、一時勢いが衰える。

Meanwhile, alas  
 For me no fellow-men,  
 No salvia-frenzied comrades, antenna  
 Of yellow-red, outreaching, living wrath  
 Upon the smouldering air,  
 Red, angry men are a race extinct, alas!<sup>(34)</sup>

「それなのに、ああ／私に味方してくれる仲間はいない」(Meanwhile, alas / For me no fellow-

men) と悲嘆にくれる。詩人に「味方してくれる仲間」とは、熱狂的な情熱、激怒の金色の喉を持つもの、いわゆるサルビアの性質の人間を指す。汚れたこの現実世界では、詩人が望むような崇高な生命力を携えたものは、もういない。何故なら、「赤い怒った人間たちは絶滅した民族」(Red, angry men are a race extinct,) なのだから。それは遠い昔、ローマ人によって滅ぼされたエトルリア人 (Etruscan)、あるいは北アメリカのレッド・インディアン (Red Indian)、またはニュー・メキシコのプエブロ人 (Pueblo Indian) のような、古代異教に沿って純粹に生きた人々のことを云わんとしている。『アポカリプス』においても、彼らこそが「赤き竜、華麗なる赤竜である」(It is the red dragon, the beautiful red dragon)<sup>(35)</sup>とロレンスは語っている。

詩人の落胆はこれだけに終わらず、執拗に反復される。

Never, bolshevistically  
 To be able to stand for all these!  
 Alas, alas, I have got to leave it all  
 To the youths in Sunday suits and yellow shoes  
 Who have pulled down the salvia flowers  
 And everything else to their disgusting level,  
 Never, of course, to put anything up again.<sup>(36)</sup>

「ああ、ああ、私はすっかりそのことを委ねてしまった」(Alas, alas, I have got to leave it all) とまるで敗北を認めるかのようなつぶやきである。闇に包まれたはるか昔、気高く美しいハイビスカスと激しい潜勢力を秘めたサルビア、バラ色に輝いていたこれら真紅の花々は、今では卑しい主義者たちの胸に飾られることとなった、それを許してしまったと詩人は嘆く。しかも「その他全てのものまでも、彼らの実に嫌なレベルまで引き下げて／もちろん決して再び何も押し上げようとはしない」(And everything else to their disgusting level/ Never of course to put anything up again)。サルビア的、ハイビスカスの人間が消滅した後、くずと化した人類は墮ちる所まで墮ちたのだ。

しかし、最後の最後に詩人は力を吹き返す。

But yet  
 If they pull all the world down,  
 The process will amount to the same in the end.  
 Instead of flame and flame-clean ash,  
 Slow watery rotting back to level muck  
 And final humus,  
 Whence the re-start.<sup>(37)</sup>

世界の全てが反サルビア的な彼らのレベルに落とされようとも、「その推移は結局同じことになるだろう」(The process will amount to the same in the end) と、何かを確信している様子である。つまり、たとえ「汚物」(muck) と「腐葉土」(humus) に成り下がったとしても「ゆっくりじめじめ腐りながら」(Slow watery rotting)、最後は肥料となる。一度は彼らに明け渡した世界でも、全てを焼き尽くせば「炎と炎で浄化された灰の代わり」(Instead of flame and flame-clean ash) となるのだ。全てを原点に戻した時、華麗なる赤竜の生命は、甦る不死鳥のごとく、「そこからが、再出発」(Whence the re-start) なのだから。

ロレンスの竜に対する興味の増大は、1923年、メキシコのチャバラ (Chapala) でのカーター (Frederick Carter) との出会いに要因すると自ら紹介している。カーターの著書『黙示録の竜』(*The Dragon of Revelation*) では、竜を占星学的に十二宮のひとつ、竜座と見なし、竜座は天の北極にぐるりと位置している宇宙の中心であると解釈している。いわゆる、万有の力を兼ね備えたようなウロボロス (Ouroboros) と呼ばれる、尾を口にくわえた宇宙蛇のことである。ロレンスは、マクロコスモス (the macrocosm) へと解放されるのを想像する時、自分の足が軽く、強くなり、ひざが躍動するような感情の高まりを抑えることができないと吐露している<sup>(38)</sup>。大宇宙との結びつきを以前から唱えていたロレンスは、カーターのこの説に裏打ちされたように、半鳥半蛇の生き物を古代異教の神として描いた『翼ある蛇』(*The Plumed Serpent* 1926) を書き上げ、後に『アボカリプス』においては「竜がのたうち荒れまわる世界は、あの星辰きらめく広大なコスモスなのだ」(It is the vast cosmos of the stars that the dragon writhes and lashes)<sup>(39)</sup>と、竜と宇宙との関連を決定的なものとして結論づけている。いずれにしても、幼い頃からずっと『ヨハネの黙示録』に対して違和感を抱いていたロレンスは、そこに登場する、赤い竜を含めた黙示録の象徴たちに特別な感情を持っていたことは疑いようがない。そしてついには「ハイビスカスとサルビア」の詩の中で、竜のイメージを援用して己のキリスト教観を謳い上げたのである。ヨーロッパの現代文明の腐敗は、長い間キリスト教が、その実践においてももたらしたものであるという、ロレンスの怒りが爆発したものだと考える。悪魔として蛇に変えられたヨハネの赤い竜を、生命の王者としてふたたび詩の中で甦らせることは、ヨーロッパに深くしみこんだキリスト教世界観の呪縛から人々を解き放ち、ロレンスの願うコスモス的的生命に繋げるひとつの手段であったに違いない。燃えるがごとき怒れる竜、その赤い色を復活の象徴として。

〔注〕

- (1) D. H. Lawrence. *Apocalypse*. Harmondsworth: Penguin, 1995. chap. 3. pp. 67-69.
- (2) Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts (ed). *The Complete Poems of D. H. Lawrence*.

- Harmondsworth: Penguin, 1993. p. 312.
- (3) 古竹迪夫『まざー・ぐーす』中教出版 1982.
  - (4) Vivan de Sola Pinto & *op. cit.*, p. 313.
  - (5) *Apocalypse. op. cit.* chap. 5, p. 75.
  - (6) *Ibid.*, chap. 3, p. 69.
  - (7) *Ibid.*, chap. 3, p. 68.
  - (8),(9) Vivan de Sola Pinto & *op. cit.*, p. 312.
  - (10) *Ibid.*, p. 313.
  - (11) *Ibid.*, p. 210.
  - (12) *Ibid.*, p. 314.
  - (13) *Ibid.*, p. 315.
  - (14) 新約聖書『ヨハネの黙示録』第12章、20章、日本聖書協会、1961.
  - (15) *Apocalypse. op. cit.* chap. 16, p. 128.
  - (16),(17),(18) *Ibid.*, chap. 16, p. 127.
  - (19) Vivan de Sola Pinto & *op. cit.*, p. 313.
  - (20) *Ibid.*, p. 314.
  - (21) Edward D. McDonald(ed.). 'Study of Thomas Hardy' in *Phoenix*. London: Heineman, p. 311.
  - (22) Vivan de Sola Pinto & *op. cit.*, p. 313.
  - (23),(24) *Ibid.*, p. 314.
  - (25),(26),(27) *Apocalypse. op. cit.* chap. 16, p. 123.
  - (28) Vivan de Sola Pinto & *op. cit.*, p. 316.
  - (29) 古我正和『ロレンス研究—西洋文明を超えて—』大阪教育図書、1996.
  - (30) Frieda Lawrence. "Not I, But the Wind...". London: Heineman, 1935. p.122
  - (31) Vivan de Sola Pinto & *op. cit.*, p. 317.
  - (32) *Ibid.*, p. 316.
  - (33) *Apocalypse. op. cit.* chap. 6, p. 80.
  - (34) Vivan de Sola Pinto & *op. cit.*, p. 317.
  - (35) *Apocalypse. op. cit.* chap. 16, p. 128.
  - (36) Vivan de Sola Pinot & *op. cit.*, p. 317.
  - (37) *Ibid.*, pp. 317-318.
  - (38) *Apocalypse. op. cit.*, pp. 45-46.
  - (39) *Ibid.*, chap. 16, p. 124.

(まつもと けいこ 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

(指導：古我 正和 教授)

2005年10月19日受理